



温家宝・中国首相の来日を検証する



国際教養大学理事長・学長

中嶋 嶺雄

1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科（国際関係論）修了。社会学博士。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長などを歴任。現在、国際教養大学理事長・学長、東京外国語大学名誉教授、教育再生会議有識者委員。「北京烈烈」（サントリー学芸賞受賞）『21世紀の大学』『歴史の嘘を見破る』など著書多数。03年度「正論大賞」受賞。

この4月中旬の温家宝・中国首相の来日は、小泉政権時代に凍てついていた日中関係が大きく変化し、和解に向かったことを示していた。短い滞在であったが、日本の市民と接したり、国会で演説したり、さらには天皇陛下への謁見も実現したりと、中国側はその成果をしきりと誇示している。現に4月13日の『人民日報』の一面トップに「温家宝総理、日本の明仁天皇と会見」と題する記事をカラー写真付きで載せていて、「日中両国の和睦」が永遠であるかの内容になっている。同日の『人民日報』には、温家宝首相の「友誼と協力のために」と題する日本国会での演説も全文が掲載されており、「両国民の世代世代の友好を実現することは歴史の潮流と両国民の願望に完全に符合し、またアジアと国際社会が切実に期待するところである」と解説されている。

このような中国側の報道に接すると、今回の温家宝首相の訪日が、中国にと

って極めて成果の大きいものであり、温家宝首相自身の権威の増大に資するところも大きかったことが理解できる。安倍首相の昨秋の電撃的な訪中の結果が活きているとはいえ、いわゆる靖国問題や歴史認識の問題で、こじれにこじれていた数カ月前の日中関係を想うとき、中国側の変化の大きさには、改めて驚かされる温家宝首相の来日であった。

一方、わが国の側には、さしたる変化があったわけではない。安倍首相自身、靖国問題での「あいまい外交」を翻したわけではなく、歴史認識において譲歩したわけでもない。ただし、東京ばかりか大阪の政財界人に接した温家宝首相に対し、日本側はサービスのし過ぎであったとも言えよう。表面的な日中友好外交の展開にもかかわらず、東シナ海の問題や中国の著しい軍事力増強の問題、宇宙覇権さえ狙おうとしている中国の野心的な宇宙開発問題、さらには台湾問題での中国

側の強硬姿勢には、いささかの変化も認められないからである。

この点では、自民党の中川昭一政調会長が批判していたように、中国のトップである胡錦濤主席こそ来日すべきなのに、それを避けた中国は外交上非礼だというべきであろう。その点で、胡錦濤主席、呉邦国全国人民代表大会常务委员会委員長に次ぐ党内第3位の温家宝首相を天皇陛下との会見に導いた日本側外交当局に問題があったと言える。しかし、天皇陛下に「北京五輪に来ていただきたい」と外交儀礼をもわきまえず発言した温家宝首相に比して、「自分の外国訪問は政府が検討いたします」と明快に答えられた天皇陛下の毅然とした態度が目立った点では、よかったのかもしれない。中国は国内の安定、環境問題の処理、経済の先行き不安もあって、今や日中友好を強く欲していることが歴然としたという点でも、温家宝首相の来日には少なからぬ意味があった。